慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「音声言語理解7」に意見交換という活動を設けることの意義：reflectionシートの分析を通しての一考察
Sub Title	
Author	石塚, 京子(Ishizuka, Kyōko)
Publisher	慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター
Publication year	2024
Jtitle	日本語と日本語教育 No.52 (2024. 3) ,p.113- 132
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	授業報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00189695-20240300-0113

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾大学　日本語・日本文化教育センター紀要
『日本語と日本語教育』52：113–132（2024.3）

「音声言語理解7」に意見交換という活動を設けることの意義

―reflectionシートの分析を通しての一考察―

石　塚　京　子

1.　はじめに

音声、いわゆる聴解の授業というと、CDなどの録音を聞いたり、ニュースやドラマなどの録画を視聴したりしてその内容を理解する練習をまず思い浮かべるのではないであろうか。しかし、『交流基金日本語教授法シリーズ第5巻「聞くことを教える」』（2008）では、私たちは、さまざまな場面で、さまざまな目的を持って、さまざまな内容のメッセージ（人から人へ伝達される情報）を聞いて理解しながら日常生活を送っている。日常生活の聴解には（1）対面聴解（話し手と向き合って直接聞く）、（2）非対面聴解（ラジオ、テレビ、テープ、CDなどの録音を聞く）、の2種類があり、日常生活の聴解では対面聴解がとても多いことがわかっていると述べられ、非対面聴解だけでなく、対面聴解も大事な技能として教室の中に取り入れていくべきことが示唆されている。また、コミュニケーションは、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことの4技能からなっているが、私たちが日常生活で「聞くこと」に使う時間は、全体の50％以上を占めると考えられる。つまり、「聞くこと」はコミュニケーション活動の中心であり、「聞くこと」をほかの技能と組み合わせて教室活動をデザインすることの重要性も明記されている。そこで、音声言語理解7の授業では、①「聞くこと」がコミュニケーション活動の中心であること、②日常生活で

は非対面聴解より対面聴解が多いことを前提に、非対面聴解の練習だけでなく対面聴解の要素を持つ活動を取り入れることを考えた。

『交流基金日本語教授法シリーズ第 10 巻「中・上級を教える」』（2011）では、「初級」は、ゼロの段階からの学習だから、語彙や文法などの言語形式の面にどうしても重点を置く必要がある一方、「中級」「上級」になれば、基本的な語彙や文法の知識は習得されているから、より「内容重視」の教え方が可能になる。「内容重視」とは、読んだり聞いたり書いたり話したりする内容そのもの、メッセージを重視することであり、語彙や文法などの学習は、メッセージのやりとりの中で統合的に扱われると述べられている。そして、ことばには形式上（文法、語彙、音声など）の正確さ（accuracy）とともに、それを実際に運用するときの流暢さ（fluency）が必要とされ、「初級」では正確さに重点が置かれがちであるが、「中級」「上級」では流暢さを高めていくことが大切であるとも書かれている。ことばが流暢に使えるようになるには「言語知識」があるだけでなく、知識を瞬時に引き出して使えるようになる必要があり、それにはアウトプットをくり繰り返し行う活動を授業に取り入れることが重要であると記述されている。

音声言語理解 7 は上級学習者を対象とした聴解の授業であるため、非対面聴解練習を主な授業内容としつつ、①②を前提に、③内容重視型で、④ことばの流暢さを高めることを目的とした「意見交換」という活動を取り入れた授業デザインを行った。本稿では、この活動の最後に書いた reflection シートを用いて、学習者は学習の何を振り返り、何に気づいたのかを分析する。更に、音声言語理解 7 の一部にこの「意見交換」を取り入れたことで学習者は何を学んでどう成長したのかを考察し、活動の意義を考えるものである。

表 1　「履修者の出身地・性別・日本語レベル」

No	呼び方	出身地	性別	レベル	No	呼び方	出身地	性別	レベル
1	学生 A	台湾	女性	6AM	8	学生 H	台湾	女性	6BM
2	学生 B	台湾	女性	6AM	9	学生 I	台湾	男性	6BM
3	学生 C	台湾	男性	6AM	10	学生 J	台湾	女性	6AP
4	学生 D	中国	女性	6AM	11	学生 K	中国	女性	6AP
5	学生 E	中国	男性	6AM	12	学生 L	中国	女性	6AP
6	学生 F	中国	女性	6BM	13	学生 M	中国	女性	7M
7	学生 G	中国	女性	6BM	14	学生 N	中国	男性	7P

（個人情報保護のため，14 名の履修者を学生 A～学生 N と呼ぶ.）

2.　クラス概要

本稿は、慶應義塾大学日本語・日本文化教育センターの日本語研修課程に設置された科目「音声言語理解 7」において 2023 年度秋学期（2023 年 10 月～2024 年 1 月）に行った授業の内容に基づくものである。この章では以下にクラスの概要を示す。

【履修者数】14 名（出身地と性別、日本語のレベルは表 1 の通りである）

レベル：6AM → 5 名、6BM → 4 名、6AP → 2 名、7M → 1 名、7P → 1 名

よって、6 レベルが 85.7％、7 レベルが 14.3％という割合になる。

出身地：中国→ 9 名、台湾→ 5 名

男女数：女性→ 10 名、男性→ 4 名

音声言語理解 7 は上級レベルの学習者を対象としたクラスであったが、圧倒的に 6 レベルの学習者が多かった（85.7％で、8 割以上が中級後半レベルであった）。また、中国と台湾出身の学習者しか履修していない点、クラスの 2/3 以上が女性という点も特徴として挙げられる。しかし、これらの要素によって授業内容を変更することはなかった。

【目標】話し手が伝えようとしていることは何かを文字を介さずに音声を

聞いて理解できるようになることである。

【教材】1. 『留学生のためのアカデミック・ジャパニーズ聴解［上級］』

東京外国語大学留学生日本語教育センター編著

2. 担当者作成教材：「小さな農業」

（NHK『クローズアップ現代プラス』を使用）

【授業予定】教材 1 のテキストは授業の 1 回目～6 回目と 13 回目、教材 2 の担当者作成教材は授業の 9 回目～12 回目で使用する。

【授業の内容と進め方】教材 1：テキストを使用する授業では、だいたいの内容を理解することから始め、内容がわかったら簡潔に口頭で説明したり、それに対する意見を簡単に述べたり、内容を要約したりする練習を行う。テキストに沿って授業を行うが、予習はテキストの本文に出て

表 2　「授業予定」

回	内　　容	クイズ/宿題	回	内　　容	クイズ/宿題
1	テキスト-(1)		8	発表-2	
2	テキスト-(1)		9	小さな農業-1	reflection 提出
3	テキスト-(2)	クイズ (1)	10	小さな農業-2	
4	テキスト-(2)	作文提出	11	小さな農業-3	
5	テキスト-(3)	クイズ (2)	12	小さな農業-4	
6	テキスト-(3)		13	テキスト-(4)	
7	発表-1	クイズ (3)	14	期末試験	

＊教材 1 のテキストで使用した課は以下の通りである。

テキスト-（1）　第 5 課　開発途上国援助

テキスト-（2）　第 7 課 フェアトレード

テキスト-（3）　第 10 課 人はなぜ化粧をするのか

テキスト-（4）　第 12 課 ガラスの天井

＊テキスト（1）～（3）は、1 課に 2 日、テキスト（4）は 1 日で完了させた。

＊ 7、8 回目の発表とは意見交換の場のことであるが、授業の中ではこの呼び方で統一した。また、発表の実施は人数の関係から 2 回に分けた。

＊表 2 の中で、意見交換の活動に必要な授業内容とクイズ・宿題の箇所を網掛けにした。

くる語彙の意味を調べることのみで事前に音声を聞くことは課さず、復習と発展的自己学習に重点を置く。復習は、スクリプトの中からのディクテーションと漢字の読み方のクイズを実施する。また、発展的自己学習として、テキスト（1）とテキスト（2）で聞いた内容に対する意見を作文（500～600 字）にして提出し、教師チェックを受けた後、作文の発表とそれに関する質疑応答を行う。一人当たりの持ち時間は、発表と質疑応答を合わせて 10 分程度である。この作文の発表と質疑応答を意見交換の場とし、授業の中では発表と呼ぶ。発表終了後、この意見交換の活動を通して気付いたことを reflection シートに 200 字程度にまとめて提出する。この reflection シートの記述を本稿の分析対象とする。

教材 2：使用した「小さな農業」は日本社会の現状と課題、今後の展望を解説した 30 分間のテレビ番組（NHK『クローズアップ現代プラス』）であり、それを視聴して内容を理解する練習を行い、そこに出てくる語彙や表現を学習する。授業の進め方は、内容理解の助けとなるワークシート（科目担当者作成）を配布し、教材 1 のテキストとは対照的に番組の視聴を予習に課した。授業では、ワークシートに沿って内容の確認をするが、最初はグループワークで、次にクラス全体で行う。

3. 意見交換という活動について

3–1 意見交換とは

本稿は「音声言語理解 7」の授業に意見交換という活動を設けることの意義を考えるものである。一般的な上級レベルの聴解授業でも、聴き取りの練習の後で内容についての意見を求められ、それに応じた意見や感想を個人的に述べたり、グループで話し合ったりすることはあるであろう。しかし、ここで言う意見交換とは、1 章で述べたように①「聞くこと」はコミュニケーション活動であること、②日常生活では非対面聴解より対面聴解が多いこと、③内容重視型の活動であること、④ことばの流暢さを高め

るための活動であること、この①②を前提とした③④を満たす活動のことである。

3–2　活動の目的と授業デザイン

筆者は、活動としての意見交換において、3–1 で示した①～④には以下のような目的を設定し、この活動を授業の一部に取り入れた。

①「聞くこと」を他の技能である話すこと、読むこと、書くことと組み合わせる活動であること。

②聞き手が話し手と直接向き合って聞く機会を作る活動であること。

③聞き手が話し手とメッセージをやりとりする活動であること。

④アウトプットをくり返し行う活動であること。

まず、活動の流れとそれに伴う授業における学習内容や、活動における目的などを以下の表 3 にまとめる。

表 3 を見ればわかるように、音声言語理解 7 では、3 の発表だけを活動と考えるのではなく、1 のテキストの学習から 4 の reflection シートの提出

表 3　「活動の流れと活動の目的」

活動の流れ		授業における		活動における	
		学習内容	学習方法	目的	方法
1	テキスト	語彙導入	予習	①④	個人作業
			授業	①②③④	協働学習
		聴き取り	授業	①④	個人作業
		要約	宿題	①④	個人作業
		クイズ	復習→授業	①④	個人作業
2	作文	意見を書く	宿題	①④	個人作業
3	発表	意見の発表	授業	①②③④	協働学習
		質疑応答			
4	reflection	振り返り	宿題	①④	個人作業

までを意見交換の活動と捉えている。1 から 4 の活動は、1 で学習した同一テーマで進行する点も大切な要素である。つまり、学習者全員がテーマに関する基礎知識を共通して持っていることになる。また、目的①と目的④はどの学習にも掲げている。3 の発表だけを活動として取り入れたとしても、ふだんの非対面聴解では練習しにくいとされる話し手と向き合って直接聞いたり（目的②）、話し手とメッセージをやりとりしたり（目的③）する機会を与えることができる。しかし、一度限りの活動の場では、コミュニケーション活動とは言い難い上、言葉の流暢さを高めるには至らないであろう。

音声言語理解 7 の意見交換のように、1 から 4 を一連の活動とすることによって、非対面聴解だけではなかなか練習のできない目的②と目的③を想定した授業デザインができるだけでなく、目的①の「聞くこと」を話すこと、読むこと、書くこととより多く組み合わせた練習ができるため、非対面聴解練習が中心となる授業であっても、私たちの日常生活のコミュニケーション活動に近づけることができる。また、目的④のアウトプットも 1 から 4 の全ての学習において同じテーマで何度も繰り返し行うことになるため、言葉の流暢さも自然に高まると考える。このように、活動を一連の流れとして授業デザインすることが重要であることを述べておきたい。

3–3　reflection シートの役割

次に、発表の実施で一連の活動が完結するのではなく、reflection シートの提出をもって終わりとなる点について説明する。reflection シートの重要性は石塚（2021）と石塚（2023）で述べているが、これらは協働学習における作業の意義を述べたものである。しかし、今回の意見交換という活動の最後に書く reflection シートの意味と目的は、石塚（2021）（2023）で言っていることと変わりはない。この作業がなければ、意見交換の場が学習者にとって日本語を聞いたり話したりたくさんできたという感覚でしか残らないのではないであろうか。石塚（2021）では、「これを書くことで

学生は自然と協働学習による活動を振り返り、じっくりと自問自答しながら内省する機会を得ることができる。更にその内省した思考過程を外化することによって思考が整理される。学生は reflection シートを書くために、活動を振り返る→自問自答しながら内省する→思考を整理する→外化する、といった一連の作業を行っている」と述べた。

音声言語理解 7 においても同様に活動を振り返りながら内省し、思考を整理して reflection シートを書くことで、学習者は自分自身の学びに図らずも気付くようになると考える。更に、教師も学習者の発表する姿を外側から観察するだけでは十分に把握できない気付きをこのシートを通して知ることができるのである。

3–4　協働学習としての活動

ここでは、音声言語理解 7 における意見交換の活動の一部が協働学習であることを述べる（表 3 の活動における方法を参照のこと）。協働学習の概念について、大島他（2014）によれば、ピア・ラーニング（協働学習）とは、学生同士等が対等な関係において協力して学び合う考え方のことで、この考え方に依拠した活動（ピア活動）では参加者間の対話のプロセスに学びの創発があると考えると述べられている。また、ピア・ラーニングにおける学びは、(1)「学生が自分も相手もお互いに貢献できる互恵的存在であること」（相互リソース化）、(2)「対話から『問い』が生まれるプロセスを重視すること」（批判的思考の獲得）、(3)「背景の異なる多様な『他者』と向き合い、認め合う態度を身につけること」（社会的関係の構築）の 3 点にまとめることができる。加えて、ピア・ラーニングに基づく教室運営では、教師には学生同士の相互作用によって生み出されるお互いにとっての新しい成果を、活動に関わる全員が実感できるような活動をデザインし、支援する役割が求められると記されている。

意見交換という活動の目的②と③を達成するには、他者の存在が欠かせない。そして、文化背景の異なる学習者同士が対等に話し合い、その中で

全ての学習者が何かを学んで成長できるように授業デザインを行うことが重要であるため、活動の流れの中での 3 の発表は必然的に協働学習となる。一方、1 のテキストの語彙導入では、予習で各自が調べてきた語彙の意味と漢字の読み方を確認する作業に意図的に協働学習を取り入れた。それは、上級レベルになると、抽象的で多義的な語彙が多くなることから、教師が一方的に説明するより、使い方や意味を学習者同士が日本語で話し合って確認することが、より深い理解につながると考えたためである。

4. 分析

この章では、意見交換の活動の最後に書いた reflection シートを用いて、学習者は何を振り返り、何に気付いたのかを分析した結果を記述していく。シートに記載された内容を分析した結果、学習者の気付きは、(1) 聞き手としての他者の発表からの気付き、(2) 話し手としての自己の発表からの気付き、の 2 つに大きく分けられる。(1) 聞き手としての気付きは、以下の a から d の 4 項目、(2) 話し手としては e から h の 4 項目が抽出できた。

(1) 聞き手として：他者の発表からの気付き

a. 新たな知識の獲得

b. 非対面聴解（テキスト）の内容理解の強化

c. 個別発表者からの影響

d. 発表技術での発見

まず、a から d に分類した気付きの例を以下で紹介する。

全ての reflection シートは資料として巻末に掲載した。資料の文面はオリジナルのままで手を加えていない。そのため、筆者の理解と学習者の意図することに乖離が生じている可能性もないとは言えないが、筆者の理解で分析を進める。尚、下線は筆者によるものである。

a. <u>新たな知識の獲得</u>

学生 A：フェアトレードについて、消費者にも責任があるとみなが議論しましたが、この時、企業ご政府側からのサポートも重要だという意見も出されました。この意見は思わなかったので、クラスメイトの発表のおかげで、違う視点をしることができました。

学生 G：みんなの出身が異なるため、意見と考えも異なる。性差や農業の収入問題、開発途上国に対する投資、また個人のフェアトレードに対する考えなど、自分の認識以外にほかのことも了解しました。

学生 J：多くの人の発表を聞いた後、今まで自分にない観点をしることができる。

b. 非対面聴解（テキスト）の内容理解の強化

学生 C：フェアトレード商品について他の人に発表して初めてこのテーマが理解できるようになったと感じます。

c. 個別発表者からの影響

学生 F：皆さんからの質問に対して、よりよく答えを出すには、（中略）例えば、学生 N のようにボランティアの経験談を通じて自分の意見をサポートしたことや、学生 E のように出身国の現状について述べ、より充実な内容を出したことなどの方法があることに気づいた。

学生 K：クラスメートの学生 N はパワーポイントを準備しておきました。キーワードにしたがってスムーズに話せます。とても素晴らしかった。大変勉強になりました。同時に、フェアトレードについて話し合い、新しいアイディアを紹介してくれました。

d. 発表技術での発見

学生 I：他の人の発表を聞いて、自分も勉強してきた。他の人のいいところを勉強して、それを生かして、次の発表がきっとより上手だと思う。

このように、a.b.c. は他者の発表内容、d. は他者の発表態度、つまり a～d は発表の場を振り返ることによって気付いたものと考えられる。

（2）話し手として：自己の発表からの気付き

e. 新たな知識の獲得

f. 非対面聴解（テキスト）の内容理解の強化

g. 聞き手からの質問による新たな知識の獲得

h. 発表技術での反省と成果

次に、以下では、e から h に分類した気付きの例を紹介する。

e. 新たな知識の獲得

学生 B：世間で怪しい団体がたくさんがって、救援組織になりすます団体があって、お金に騙し取った例もいつくがあります。

学生 L：今回の発表を通して、私はジェンダー不平等において中国の女性の困難を考え直したいと思う。

f. 非対面聴解（テキスト）の内容理解の強化

学生 D：今回の発表を通して、私は開発途上国への支援活動に対してもっと理解を深めた。

g. 聞き手からの質問による新たな知識の獲得

学生 A：今回の発表でこのような質問をされました。「新鮮な農産物は運送している途中でくさくならないですか。」確かに、台湾の土地の面積は（中略）と思います。しかし、ほかの国なら、どうすれば農産物の鮮度を維持できるかは重要で考えるべき問題だと思っています。

h. 発表技術での反省と成果

学生 F：自分の発表の技術について不足な点だ。準備不足と緊張していたため、発表の間に何回も止まりがあった。同時に、あまりジェスチャーや表情を使えなかった。

学生 M：自分の発表についてもう一度よく考え直す機会となった。

学生 E：私は暗記が苦手だが、今回の発表では原稿を見ずにみんなに向き合って発表することができた。それは今回、発表原稿ではなく、発表の要点だけ覚えたことのおかげだと思う。

話し手としての e. f. の気付きからは、発表のための作文を書く際にいろいろと読んだり見たり聞いたりして調べたこと、つまり作文を書く過程を振り返り、g. h. からは質問されて答えに困ったことや発表がうまくできなかった、あるいはうまくできたという発表の場を振り返っていることがわかる。

5. 考察

4 章の分析結果から、(1) 聞き手としても (2) 話し手としても多くの気付きがあったことは明確である。新たな知識の獲得、非対面聴解（テキスト）の内容理解の強化、発表技術に関する何らかの発見は、(1) (2) のどちらにも見られた気付きであるが、新たな知識の獲得、非対面聴解（テキスト）の内容の強化については、(1) では発表の場を (2) では作文を書く過程を振り返ることで得られたものである。reflection を書く際に発表の場を振り返ることは容易に想像できるが、作文を書く過程にまで遡り振り返ることは、この意見交換という活動がテキストの勉強から reflection の提出までを一連の活動と捉えられていること、また活動の目的①に「聞くこと」を他の技能である話すこと、読むこと、書くことと組み合わせる活動であることを設定した結果、得られた成果ではないかと思われる。

一方、(1) 聞き手としての c. 個別発表者からの影響、(2) 話し手としての g. 聞き手の質問から新たな知識を獲得できたという項目は、(1) (2) に共通する気付きではなく異なるものであるため、聞き手側と話し手側のそれぞれの気付きの特徴を表すものではないかと考える。そして、(1) 個別発表者という他者、(2) 聞き手という他者、いずれも他者の存在があっ

たからこそ気付けたものである点が非常に興味深い。これは、この活動が、聞き手が話し手と直接向き合って聞く活動であること、聞き手が話し手とメッセージのやりとりする活動であること、という目的②③を設定してデザインしたことで効果をもたらしたと考えられよう。また、その場に聞き手と話し手が存在すること、学習者自身が聞き手にも話し手にもなること、この 2 点が大きな鍵となっているとも思われる。特に自身が聞き手側に回った時、他者の存在によって学習者は成長を遂げたと言えるであろう。自分自身の中だけで成長することももちろんあるが、学習者の成長には他者の存在が必要不可欠であることがこの活動からも明らかになったと言える。このように意見交換という活動を授業の一部に取り入れたことで、非対面聴解練習だけでは得られない成果が見られ、この活動を音声言語理解 7 に設けた意義をここに示すことができたと考える。音声、聴解の科目だからと言って常に聞くことだけを練習するのではなく、話すこと、読むこと、書くことと組み合わせて学習していくことが大切である。更に、教師は非対面聴解のみで授業をデザインするのではなく、可能であれば対面聴解の要素を持つ活動などを授業の一部に取り入れることが学習者の成長につながると考えることも必要であろう。

しかし、意見交換のような活動を取り入れれば、今回と同じような結果が毎回得られるのかは未知のことであり、今後もいろいろな活動を取り入た授業を行い、多くのデータを集めて分析を重ねていく必要があると思われる。音声言語理解の授業にどのような活動を設定すると、より効果が現れやすくなるのかを考えていくことを今後の課題としたい。

参考文献

石塚京子（2021）「オンライン授業における協働学習の可能性―「発表 5B」の reflection シートの分析を通して―」慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター紀要『日本語と日本語教育』第 49 号　pp. 97–116

石塚京子（2023）「「作文」という授業に協働学習を取り入れることの意義の一考察―上級作文

クラスの reflection シートの分析を通して―」慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター紀要『日本語と日本語教育』第 51 号　pp. 97–122
大島弥生・池田玲子・大場理恵子・加納なおみ・高橋淑郎・岩田夏穂（2010）『ピアで学ぶ大学生の日本語表現［第 2 版］』ひつじ書房
国際交流基金（2008）『国際交流基金日本語教授法シリーズ第 5 巻「聞くことを教える」』ひつじ書房
国際交流基金（2011）『国際交流基金日本語教授法シリーズ第 10 巻「中・上級を教える」』ひつじ書房

資料 1　reflection

文中の下線は、以下の a～h の分類を示したものである。

尚、a～d は（1）聞き手としての他者の発表からの気付き、e～h は（2）話し手としての自己の発表からの気付き、である。

a. _____ 新たな知識の獲得

b. ═══ 非対面聴解（テキスト）の内容理解の強化

c. -·-·-·- 個別発表者からの影響

d. ..... 発表技術での発見

e. - - - - - - - 新たな知識の獲得

f. _____ 非対面聴解（テキスト）の内容理解の強化

g. -·-·-·- 聞き手の質問からの新たな知識の獲得

h. ～～～～～ 発表技術での反省と成果

学生 A

（2）g. 今回の発表でこのような質問をされました。「新鮮な農産物は運送している途中でくさくならないですか。」確かに、台湾の土地の面積は大きくないので、農産物はすぐくさくなる問題はないと思います。しかし、ほかの国なら、どうすれば農産物の鮮度を維持できるかは重要で考えるべき問題だと思っています。そして、（1）a. フェアトレードについて、消費者にも責任があるとみなが議論しましたが、実際にフェアトレードの商品

の値段が高いため、みなはあまり買わないです。この時、企業ご政府側からのサポートも重要だという意見も出されました。この意見は思わなかったので、クラスメイトの発表のおかげで、違う視点をしることができました。

学生 B

寄付するのが日常生活でよく聞こえていますが、やはり自分で実行するのは難しいです。なので、クラスメートに「自分が寄付することができますか」と聞きられたが、（2）e. 世間で怪しい団体がたくさんがって、救援組織になりすます団体があって、お金に騙し取った例もいつくがあります。正直に自分が寄付するつもりがありませ。

学生 C

作文の長さは 400 字であるべきだと誤解したため、フェアトレード商品について十分書きませんでした。（2）f. 発表を通じて、このテーマについてより包括的な理解を得ることができました。また、（1）b. フェアトレード商品について他の人に発表して初めてこのテーマが理解できるようになったと感じます。

学生 D

（2）f. 今回の発表を通して、私は開発途上国への支援活動に対してもっと理解を深めた。途上国の貧困者の収入を改善したら、先進国の開発支援と国際協力は必要だと思う。国際的には、政府開発援助委員会による援助活動が展開られているが、最も重要なのは、給与格差を是正することだ。先進国は途上国を支援し、資金や技術を提供し、そして途上国の工業の発展と技術の向上することを目指すべきだと思う。

学生 E

今回は、発展途上国支援の中に、支援する側が逆にされる側にいじめたり差別したりすることについて発表した。ここで今回の発表で良かったこと、困ったこと、今後の改善点について振り返す。

（2）h. 私は暗記が苦手だが、今回の発表では原稿を見ずにみんなに向き合って発表することができた。それは今回、発表原稿ではなく、発表の要点だけ覚えたことのおかげだと思う。要点だけ覚え、暗記する際に自分の言葉で展開すれば、丸暗記をしていると感じさせないようにすることができる。また、今回の発表では、自分の観点を箇条書きにして話した。この方法を使うことで、聞き手は私の発表の内容をより深く理解することができ、発表後の質問や意見交換もスムーズになった。

学生 F

今回の発表を技術と内容の 2 点から振り返りたいと思う。まず、（2）h. 自分の発表の技術について不足な点だ。準備不足と緊張していたため、発表の間に何回も止まりがあった。同時に、あまりジェスチャーや表情を使えなかったため、多少聞きにくい発表になったと思う。

そして、自分の発表の内容について不足な点だ。（2）g. 皆さんからの質問に対して、よりよく答えを出すには、自分の身近なことや経験など、ジェンダー問題における支援の例を事前に集めた方がいいと思った。例えば、（1）c. 学生 N のようにボランティアの経験談を通じて自分の意見をサポートしたことや、学生 E のように出身国の現状について述べ、より充実な内容を出したことなどの方法があることに気づいた。

学生 G

（2）e. フェアトレードや開発途上国に対する支援についてみんなの発表を聞いて、たくさんの示唆を受けました。医療、教育、児童労働問題など、

いくらの物資の寄付より正しい形で支援を行うのはさらに有効だということを感じました。(2) e. みんなの出身が異なるため、意見と考えも異なる。性差や農業の収入問題、開発途上国に対する投資、また個人のフェアトレードに対する考えなど、自分の認識以外にほかのことも了解しました。また、(1) d. 発表の挨拶やマナーについてもたくさん勉強しました。

学生 H

(2) e. 今回の発表をしてから、私は買い物する時、フェアトレード商品を選択するようになった。確かに価格は他の商品より高いが、寄付と異なる方法で、日常生活の中で何かを購入するという手段で、開発途上国に支援できる。他の費用から節約すれば（例えばタピオカミルクティを買わず水だけを飲む)、フェアトレード商品を選択してもそんなにお金をかかると思わない。また、(1) c. 学生 G がおっしゃったとおり、私たちは知らないうちに、フェアトレード商品を買ったかもしれないので、フェアトレードという仕組みの認知度を上げるべきだと思う。

学生 I

(2) h. 今回の発表を通して、いろいろなことを勉強しました。まず、日本語の発音を正しくしないといけない。今回の発表する時に、「有機農業」という単語の発音が下手なので、聞き手がうまく聞き取れなかった。そして、(2) h. 聞き手とのアイコンタクトが少なかった。発表する時に、他の人とアイコンタクトが大事だと思う。聞き手の視線を合わせるのは聞き手が発表の内容を理解するかどうかを確認することができるのみならず、発表の魅力も増えてくる。最後に、(1) d. 他の人の発表を聞いて、自分も勉強してきた。他の人のいいところを勉強して、それを生かして、次の発表がきっとより上手だと思う。

学生 J

（1）d. クラスメートの発表を聞いて、それぞれの強みがあり、非常に勉強になった。例えば、表現、文法が完璧で、時間をかけて考えなくても自然な日本語がすらすら出る人、スライドを使って図形で内容をわかりやすく説明したり、感情のある声と手振りで伝えたりする人、また発表テーマを自分の日常的な消費体験を結びつき、実際にフェアトレードの商品を買って飲んだ感想を伝える人もいる。（1）a. 多くの人の発表を聞いた後、今まで自分にない観点をしることができる上に、（1）d. 自分の発表にまだまだ足りないところも気付かせてくれるいい機会になったと思っている。

学生 K

（2）h. 今回の発表はしっかり準備して暗記しましたが、話す時はちょっと緊張して、言葉やアクセントの強弱がほとんどありませんでした。また、質問に答える時、どのように答えるのか分からなくて、よく考えずに答えてしまって、文法のミスがつい出てきました。これから気をつけます。そして、（1）c. クラスメートの学生 N はパワーポイントを準備しておきました。キーワードにしたがってスムーズに話せます。とても素晴らしかった。大変勉強になりました。同時に、フェアトレードについて話し合い、新しいアイディアを紹介してくれました。

学生 L

（2）e. 今回の発表を通して、私はジェンダー不平等において中国の女性の困難を考え直したいと思う。開発途上国の女性は主に、基本的な生活保障を保たない状態で、健康や教育へのアクセスの制約などの問題がある。中国は発展途上国だが、多くの女性が基本的生活保障を保つことができる。しかし、問題は、学校や職場という才能や他人との競争を必要としているところに生じた。職場上での男女間の賃金格差とか、女性特有の悩み、職業

上の成功と家庭生活の調和とか、その裏側には、女性の貧困と女性の育児負担などのジェンダ不平等の問題がある。また、中国の大学では、女性は文系を選ぶ方がいいという評判がある。数学や科学という理系のコースは女性にとって難しくて、選ばない方がいいというステレオタイプがある。しかし、就職の時には、文系向けの仕事でも、男性優先というルールのなる企業が少なくない。それは、女性にとってかなり厳しい状況である。勉強と昇進の能力があっても、性別だけで良い機会を失ってしまう。ジェンダー平等とは、女性は男性と同じ権利を持つことを求めるのである。格差をなくし、家父長制から解放し、根本的に社会を変える力が必要である。そうすると、きっとよりよい社会を築けるだろう。

学生 M

発表の後にとてもよい質問をいただき、(2) h. 自分の発表についてもう一度よく考え直す機会となった。気づきは 3 点ほどある。一つ目は、シェアした事例の出典を明確にすること。詳しく言わなくても自分では知っているが、聞き手はわからない。人名など聞き取れない部分はホワイトボードに書くといい。二つ目は、引用した内容と自分の考えをはっきり分けて話すこと。すこし混ざっていて、自分の主張は聞き手に明確に伝わらなかったところがある。今後注意すべきだと思う。これは論文を書く時にも大事だ。三つめは、日常生活の中ではどうすればいいのかという対策もいくつか提示すればよかったこと。開発途上国支援もフェアトレードもやや抽象的なトピックなので、どうしたら日常生活につなげるのかを提案すれば、聞き手にとって実感がわいてくるのだろう。347 字

学生 N

(1) a. 皆様の農林産業、フェアトレード、発展途上国の女性の権利や教育についての発表を伺い、大いに啓発された。(1) c. とりわけ学生 K の発表

では、フェアトレード運動が盛んに行われる時、スムースに行けるかという問題を提起し、その実行におけるさまざまな障害や問題を説明してくれた。例えば、発展途上国の法律か完全されていない問題、フェアトレード商品は価格的に競争力が低い問題などである。（1）a. それらの説明を伺い、フェアトレードを消費者に対する罠として捉えていた私は、フェアトレードにおける問題の解決に取り組んでいる人々に敬意が生じた。また、ある運動を評価する時に、自分でその原理を考察するより、むしろそれらが実行される時の具体的状況に目を向けるほうが合理的だと思うようになった。（2）h. 今回の発表も細部に気をくばり、例をあげながらわかりやすくしようと思った。学生 K の発表のほか、女性向けの奨学金を設けるべきか、ODA でフェアトレードに協力すべきかといった課題も次々と取り上げられ、それらの複雑な課題を考える際も、実践の経験を交えて捉えるべきだろうと思う。